

イタリア語における二人称代名詞 《tu(君)》と《Lei(あなた)》の差異の意味について

村 岡 潔

〔抄 録〕

本稿は、イタリア語における2種類の2人称の使い分けの意味づけに関する文化人類学的試論です。その2種類とは、親称《tu》と敬称《Lei》で、語学テキストや文法書などでは前者の二人称は「君」と、後者の二人称は「あなた」と訳されています。そこには「君—あなた」という敬語が交わされる場が日本の場合と同じだと勘違いさせる危険性があるのです。つまり、私たちは、敬語と言えば、上下関係におかれた人間同士の間で使われる言葉で「尊敬語」と「謙讓語」の関係か、あるいは、普通の、あるいはゾンザイな言い方（「丁寧語」対「タメ語」）の関係かと思ひ込むであろうからです。

このことは、日本語の上下関係を基軸とした垂直系の敬語法に対して、イタリア語の場合（欧米系の言語には多くみられる傾向がありますが）発話者と聞き手の間の文化社会的な距離の遠近に基づくプロクセミクス的な世界としての水平系の関係性という視点から見べきものです。

またそれは、We/They 二分法という身内/他人の二分法にも対応しています。

敬語法の水平性と垂直性の体系間は、それゆえに通訳不可能性とも解釈できます。しかし、筆者が大学のゼミで行っている垂直性の言語空間から水平性の言語空間にチャレンジするといった小規模な実験からは、日本語空間に慣れた学生も親称システムを模したやり方で、水平系にも変容可能な潜在能力を秘めていることが示唆されました。

キーワード 親称と敬称、We/They 二分法、垂直性/水平性、proxemics、イタリア語

(1) 2種類の二人称とは？

本稿は、イタリア語における2種類の2人称の使い分けの意味づけに関する文化人類学的試論です。その2種類とは、《tu》と《Lei》⁽¹⁾で、語学テキストや文法書などでは前者の二人称は「君」と、後者の二人称は「あなた」と通常訳されています。しかし、この「君—あなた」という一対の訳語は、日本人の理解を混乱させるものになっていると思われる。

それは「君—あなた」という敬語が交わされる場が日本の場合と同じだと勘違いさせる危険性があるからです。つまり、私たちは、敬語と言え、上下関係におかれた人間同士の間で使われる言葉で「尊敬語」と「謙譲語」の関係か、あるいは、普通な、あるいはズンザイな言い方（「タメ語」）対「丁寧語」の関係かと思ひ込むであろうからです。

日本語による代表的なイタリア語の文法書⁽²⁾では、「2人称には《親称》と《敬称》があり、これを使いわけることによって《話し相手》との人間関係の疎密を表現することができる」とあり、また2人称親称の「tuは一般に同一家族（親子・夫婦・兄弟姉妹・親類など）の間、友人の間、親しい知人に対して、子供（それがどんな高位の人の子供であっても）に対して使用する。つまり、親しみを表すものである」とされています。ですから、続けて「このため日本語に訳すとき必要に応じて「あなたは」と訳してもかまわない。また、ときとして、相手を見下して「お前は」を意味することもある」と解説されてきています。

筆者は2009年の研修期間中、6月から翌年2月まで（途中約1月間帰国）ローマに滞在しましたが、渡欧まで京都の語学校で習っていた頃は、tuとLeiの使い分けをこうした上下関係を基軸にした日本式の敬語法で理解していました。もちろん、上述の解説をなさっているイタリア語の大御所の坂本先生はきちんとわかっておられるわけですが、日本語に訳そうとすると途端に日本式の上下関係の敬語法で表現するほかない状況に追いつまされてしまうわけです。

本稿では、この日本式敬語法を便宜上「垂直系」と形容します。それに対応して、イタリア語の敬語法は（解題は後述しますが）「水平系敬語法」と表現します。本稿の結論を先取りして言えば、日本式の「垂直系敬語法（‘vertical’ system of honorific expression）」とイタリア式の「水平系敬語法（‘horizontal’ system of honorific expression）」の間には、基本的に共訳〔通訳〕不可能性（incommensurability）があると言わざるをえません。

ちなみに、水平系敬語法あるいは「親称（familiar form）/敬称（polite form）の二分法」は、他のヨーロッパ言語でも珍しくないようです。例えば、ドイツ語の或る文法書⁽³⁾を見ると「2人称には2種類あります。親称2人称は、du, ihrは心理的な距離を置かずに話せる相手（家族・親戚・親友・恋人や15歳以下の子供や神・動物）に対して用い、それ以外の者に対しては3人称複数の代名詞sie「彼ら」〔あるいは3人称単数の彼女〕を大文字にしたSie（ズイー）を単数にも複数にも用います。これを敬称2人称といいます」と。この場合、イタリア語とドイツ語の2人称の間には；

イタリア語：tu-Lei [注：小文字の lei は「彼女」を指す]

ドイツ語： du-Sie [注：小文字の sie は「彼女」あるいは「彼女ら/彼ら」を指す]

のようなパラレルな関係が見られます⁽⁴⁾。また、図書館や書店の外国語のコーナーで調べた結果は、スペイン語、ポルトガル語、フランス語、ロシア語などの敬語法も水平系となっています（ちなみにフランス語⁽⁵⁾では、tu-vous で、3人称ではなく2人称複数と同型の vous が使われています）。

さらに、大岩⁽⁶⁾は、「du、ihr は、便宜上「君」「君たちは」と訳をつけましたが、実際には必ずしもこの訳語が当てはまるとは限りません。たとえば、妻は夫に向かって du と言いますが、この場合はふつう「あなた」と訳すべきでしょう。また、上役が若い社員に対して Sie という場合には「君は」と訳さねばならないこともあります」と、但し書きをしています（それはイタリア語でもおおむね同じと言えます）。

このことは、tu/du はある時は「君」である時は「あなた」という訳になり、一方、Lei/Sie はある時は「あなた」である時は「君」という訳になるというわけです。ですから、端的に言えば、こうした水平系の敬語法の説明を、垂直系の敬語法で説明することは不適切である（incommensurable）ということを意味しています。

なお、文法の形式上は、親称と敬称の区別がないにも関わらず、実質上は、垂直系ではなくて水平系であると言える欧米系の言語の好個の例は、現在の英語あるいはザメンホフによる 에스ペラント（語）です。

ただし、苅部によると⁽⁷⁾、英語では、初期近代英語期や中英語期には親称の《thou》と敬称《You》とが存在しましたが、現代英語では周知のごとく二人称の you はもはや敬称ではありません。それと「親称の thou は、現在では一部の Quakers 同士や方言で親が子に、あるいは親しい者同士で用いる以外は、神やイエス・キリストへの呼びかけや説教・詩歌・格調高い散文」で使われているだけのようです。一方、エスペラント（語）は相当な簡略化が行われた人工言語⁽⁸⁾ですから、その文法には親称・敬称の区別は一般には記載されていません⁽⁹⁾。

また、「このように現代の英語は相手が仲間同士か否かの判断・区別を2人称代名詞によらない別の方法」で行なっています。例えば、「仲間には John のように first name で」呼びかけ、仲間意識のない相手には Mr./Dr./Prof.of Smith のように敬称を last name に付けて呼びかける方法」であったり、もう一つは「命令文と丁寧な依頼」「例えば仲間の相手には“Close the window!” と言い、仲間意識のない相手には“Will [Would/Could] you please close the window? / Would you mind closing the window?” と言って使い分ける方法」で対応する方法であったりします。⁽¹⁰⁾

つまり、イタリア語や独・仏語の親称/敬称のシステムも、英語のような、そのシステムが一般に歴史的に消滅した言語でも、親しいものとそうでないものを仕分けるシステムをそれぞれの言語体系（水平系のシステム）に内在させているということが出来ます。そうした身内と

他人の仕分けの表象となるシステムのことを、本稿では便宜上、「We/They の二分法」と呼ぶことにします。すると、二人称の親称/敬称のシステムは、We/They の二分法の範疇 (category) に含まれるわけで、これまで問題としてきた内容は「身内/他人」「我/彼」といった二分法の領域の問題だったということになります。

(2) We/They 二分法と敬語法の水平性と垂直性

前節で示唆されたように、本節では、まず、水平系敬語法が、文化人類学などで人間同士の位置関係の距離を扱うプロクセミクス (proxemics; 近接学/近接空間論) の問題であることに注目します。つまり、We/They の二分法は「社会距離」や「公衆距離」における「近接相」対「遠方相」の関係⁽¹¹⁾に相似していると言えます。

卑近な例としては、京都ではよく知られている鴨川沿いの夏の風物詩とも言えそうな男女のカップルの夕涼みの風景があります。それを川端のビルの屋上ビアガーデンの会場などから見おろすと、ほぼ等間隔 (3 m 位ずつ) にきれいに距離を置いて並んでいる様子が見てとれます。これは京都市の条例や何かの人為的な指示に従って同じ間隔で並んでいるのではなく (そういった立札などはありません)、自然発生的に各カップルが隣のカップルとの兼ね合いで自分たちのフィーリング (お隣り同士干渉しないレベル) で隣を目視しながら決めて座った結果なのです。これはまさにプロクセミクスでいう近接相と遠方相が交互に展開されている姿なのです (これは他の動物、例えば電線に止まっているコトリにも見られる現象です)。そこにカップル A とカップル B が隣同士で座っているとします。カップルの男女同士が話す会話は、親称の tu の体系で行われます。ところが、それぞれが知り合いでないとすると、カップル A とカップル B の誰かが話を交わすとすれば、その会話は敬称の Lei の体系で行われるはずで

す。それは、両者の水平距離が決定する (本稿では「水平性」としておきます) のであり、決して、相手が年上だから、先生だから、会社の社長と平の事務員と言った職階 (身分) が違うといった上下関係で決まる性質 (本稿では「垂直性」としておきます) で決まるわけではありません。

ちなみに Lei の体系の雰囲気を理解してもらうために、文例を文法書から引いてみましょう。⁽¹²⁾

“Lei, signorina, perche’ dorme durante la lezione?”

この意味は「お嬢さん、あなたはなぜ授業中に眠るのですか?」ですが、これをそのまま英語に置き換えるとすると、

“She, Miss., why does she sleep during the lesson?”

ようになります。これは、三人称の構文ですから、筆者は、はじめこういう形式になかなか

なじみませんでした。一方、tu の体系では日本語の「あなたはなぜ授業中に眠るのですか？」でも「君はなんで授業中に居眠りするのさ？」でも、同一の文章；

“Perche’ dormi durante la lezione?”

のようになります。潜在的に水平性の親称/敬称システムを保持す現代英語でも、同様に；

“Why do you sleep during the lesson?”

のようになります。これは英語では、親称にも敬称にもなるはずのものです。

つぎに日本型の垂直系敬語法も「We/They の二分法」を内包しているかについて少しく見てみましょう。先述のように、現代日本語の場合、{尊敬語・謙讓語}、{丁寧語・普通表現(ため口など)} などがありません。前者は明らかに垂直性と言えましょう。後者の丁寧語は敬語法に入れぬ学者もあるようですが、山口堯二氏は敬語法とみなして⁽¹²⁾、例えば「だ・である調」よりも「です・ます調」で語るような丁寧語に関しても、尊敬語と謙讓語同様に、上下関係を暗示することで聞き手に敬意をはらうことになるとしています。このことは、丁寧語でも普通表現でも垂直性があることを示唆しています。

また、山口氏は「現代語では、尊敬語(為手尊敬)と受け手尊敬の謙讓語とは、一つの動作の表現に、普通重ねては用いられない。しかし、古代語では、一つの動作の為手と受け手が、話し手にとってともに敬意を示すべき立場の人物である場合、たとえば次のように動作の受け手にも為手にも、それぞれ敬語が使用された。そのため、受け手尊敬の謙讓語と、為手を敬う尊敬語とは、重ねて用いられることが多い」とし、さらに「自敬表現がめだつことは、身分的な上下の差が敬語使用に直結する度合いも高く、聞き手との関係を中心とする場面による敬語の変容が比較的少なかったことを示し、このような上下関係が敬語使用に直結する敬語法のあり方の総体を「絶対敬語」といい、古代語の敬語法は後世に比して絶対敬語の特徴がよく備わっていたと指摘しています⁽¹³⁾。ちなみに、現代でも韓国語は、日本語に比べて、絶対敬語的であるようです。

このように日本語の敬語法の特徴が垂直性だと言えらるるとしても、このことは必ずしも水平性の要素を全く含んでいないということの証左にはなりません。しかし、日本語の構造や機能を定める日本の文化現象の慣習が垂直性の主要な決定要因になっていることは否めません。例えば、およそ全ての人間関係が垂直系となっているため、日常のコミュニケーションは垂直性の敬語法なしに済ませることは日本では至難の業です。We/They 二分法という身内でも、親子、兄弟姉妹、叔父叔母は言うまでもなく、ほぼ同時に生まれる双子ですら兄弟姉妹という上下関係に分けられます。また They にあたる他人との関係では、例えば、先生と生徒、教授と学生、店主と雇われ人、上司と部下、学生同士でも先輩と後輩など、日常の人間関係がほとんど上下関係として配置される運命にある(もちろん、こうした日本の文化現象は、それなりに社会秩序を保つうえで相当の役割をはたしてきた面があるとも言えましょう)。

しかし、一方で、グローバル化が進む現在、日本人には、イタリア人(に限らず欧米

系であるが) 風な水平性の思考の可能性があるかどうか、身近なゼミの学生との関係性のなかで、多少、思考実験的な要素もありますが、実体験としての検証を試みました。最後に、筆者のローマでの見聞と佛教大学における実験について考察しておきましょう。

(3) 縦社会の水平化のための小さな実験

先述のように、2009年に7ヶ月ほ、ローマで過ごしました⁽¹⁴⁾。これまで述べてきたように日本人の人間関係は上下関係によって決まることが多く、目上の人に対しては垂直系の敬語法を使うことが常であり、むやみに話しかけないことも美德といえます。一方、イタリアのそれは水平的で、極端に言うば長老も先生も友人もみな、自分と同じ線上に位置していると考えerほうが合っています。その距離がプロクエセミクスの意味を持つわけです。初対面では互いに敬称を使うのですが、2～3回会うと両者の距離感がぐらい会うと距離がぐっと縮まり、言わば年齢差・男女差などは基本的に無関係にファーストネームで呼びあうようになります。そして思ったことは言い、思ったことは言ってもら関係になるというわけです。それは、大げさに言えば、言いたいことを言いあうことで互いの違いを理解し、互いを尊重しあう。そうした寛容な社会に繋がる間柄のような気がしました。

ローマで通っていた語学校(日本語名『バベルの塔』)でも同様の人間関係が結ばれて行きます(これは何もイタリアだけでなく、親称/敬称の言語システムをもつ水平系の文化・社会には共通していると思いますが)、最初のクラスから、tuの体系を要請され、教師に対してもtuで語りかけ質問することが求められました。最初のクラスの教師は、Dianaという30代の女性でしたが、筆者はなかなか呼び捨てにする感じになれず、Dianaと呼びかけることが何とかできるようになるまで1週間ほどかかりました。また、個人レッスンの申し込みには、校長先生の所に行かなければならず、校長先生の名前はMonicaでした。その際もドアをたたいて「Monica、入ってもいいですか?」という不思議な感じになったものでした。しかし、ひと月もするとようやく慣れて来ました。学校のそばのカフェでも最初はLeiでマスターを読んでいたが、気がつくといつの間にかtuの体系で呼んでいました(最初に、ファーストネームで呼んだのは下宿のおばさんでしたが)。

帰国後、一年ぐらいして、ある考えがふと浮かびました。「自分のゼミでもローマの語学校で体験した、そんな間柄が学生との間につくれないか」、と。最近の学生は恥ずかしがり屋なのか、なかなか自分の意見を言ってくれません。そこで、私も含めて全員がファーストネームで呼びあう『仲間』になれば、もう少し言いたいことを気軽に言いあえるようになるのではという発想でした。ある意味これは冒険でしたが、実験(明治のころの意味での「実験」=「実際の体験」)を始めました。

もっとも、親御さんでもない筆者がゼミの学生をファーストネームで呼ぶのは少し抵抗があ

りましたので、遊びの心も込めて、『アンジェラ』とか『チャーリー』という欧米風のニックネームで呼ぶ合うようにしました⁽¹⁵⁾。最初は皆戸惑っているようですが、しばらくすると面白い学生も出て来て互いにニックネームで呼んでも通じるようになって行きました。中には、慣れない学生もいますが、多くが(まあ教師に付き合ってくれているのかもしれませんが)受け入れているようです。そして教師の私も(今年は『ジョニー』と名乗っています。

まだ、イタリアと違い面と向かって Johnnie と呼びかけてくる学生はいませんが、数名の学生は親称系ともいえる「タメ口」で友だちに話しかけるように接してくれる学生も出てきました(ゼミ日程などの業務連絡のメールでのやりとりではハイ、ジョニーと書いてくる学生は何人かいます)。

目下のところ、実験の成果は、まだ2年目なので中間報告程度ですが、日本の学生(若者)の間には垂直系だけでなく水平系の言語環境にも対応できる可能性が秘められているということは確認できたように思われます。以上、イタリア語における tu/Lei 世界の体験から得られた知見について若干の文化人類学的な考察を加えてみました。

〔注〕

- (1) 《tu》と《Lei》の発音は日本語では「トゥ」と「レイ」に近い。
- (2) 坂本鉄夫『現代イタリア文法』白水社、1979年、121-126頁。ちなみに、この定評ある文法書は今日まで版を重ねている。
- (3) 大岩信太郎『新よくわかるドイツ文法』朝日出版社、19頁、2006年
- (4) イタリア語でも二人称複数の場合、ドイツ語と同様に、彼ら/彼女らを指す Loro が対応しているが、現在では二人称複数の voi が、親称でも敬称でも使われることが多いようである。(坂本、前掲書2)、前掲頁参照)
- (5) 大峽晶子『旅の指さし会話帳17 フランス』情報センター出版局、2006年、85頁
- (6) 大岩、前掲書(3)、前掲頁
- (7) 荻部恒徳「親称の“Thou”と敬称の“You” —英語における2人称代名詞の歴史について—」
(http://dSPACE.lib.niigata-u.ac.jp:8080/dSPACE/bitstream/10191/1273/1/1_0039.pdf アクセス：2013年11月1日)
- (8) エスペラントは1887年、当時ロシア領だったポーランドのユダヤ人眼科医ザメンホフ(L.L. Zamenhof)が提案したもので、ヨーロッパ諸語の語彙を取り入れながら、文法が整理してあるので、比較的簡単に修得できる(日本エスペラント協会http://www.jei.or.jp/hp/esp_kai.htm アクセス：2013年11月5日)。
筆者の意見としては、そのため文法はヨーロッパ語系としては最も簡単であり、宇治エスペラント会会員からの伝聞だが、ある人がイタリアに行き、エスペラントで話していたら、現地の人から「それは(イタリアの)どこの方言か?」と聞かれたというほどで、譬えるなら「近代ラテン語」という感がある。エスペラントは、国際共通語を目指してつくられたもので、人々が母国語に変わる共通言語を話すようになることで世界の平和がもたらされることも視野に入れて作られたものである。実際、現在でも世界各国に話す人がいて、毎年、国際大会も開かれている。
- (9) エスペラントの2人称単数・複数はともに《vi》だが、フランスのエスペランティストの中には、親称として《ci》を使う向きもいるようだ。
(<http://blog.goo.ne.jp/esperakira/e/73c3c767f14e2a264ff4d53acc1f4910> アクセス日：2013

イタリア語における二人称代名詞《tu(君)》と《Lei(あなた)》の差異の意味について (村岡 潔)

年11月5日)

- (10) 苅部、前掲論文(7)
- (11) E T・ホール (日高敏隆・佐藤信行訳) 『かくれた次元』 みすず書房、1970年、160-181頁
- (12) 山口堯二 『日本語学入門』 昭和堂、2005年、241-250頁
- (13) 山口、前掲書(12)、251-259頁
- (14) 主な目的は、イタリア語で書かれた医学哲学関連の専門書を読む力を養ったり、関連領域の学者に会うという目的であった。その当初の目的は達成できた。
- (15) 日本では意外と知られていないが、鄧麗君 (DENG LI JUN) がテレサ・テンと名乗ったように、香港人・台湾人などの多くはテレサとかヴィヴィアンとか西洋風の名前も持っている。

(むらおか きよし 社会福祉学科)

2013年11月15日受理